

實相寺 花園会報

令和元年
八月一日発行
発行所
臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園会
〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1
TEL087-889-3838
編集発行人
山本文匡
<http://www.jissouji.net>

第124号

「白雲抱幽石」
はくうんゆうせきをいだく

元妙心寺派管長 布鼓庵 倉内松堂老大師
ふこあん くらうちしょうどう

(明治三十八年〜平成三年)



白い雲が山上の巨石を抱き込むように漂っている。深山に隠棲して過す悠々自適の日々の、穏やかな心境の象徴。
『寒山詩』の冒頭に置かれた詩にみえる語だが、元来は晋の謝靈運の「始寧の墅に過ぐ」と題する詩の一節である。

『茶席の禅語句集』朝山一玄著 淡交社
この語を見ると、いつも私は四国カルストの風景を彷彿とします。

「すわ漏水?」



7月26日の朝、出勤した寺庭さんから「お寺の西側で大量に水が漏れてるから見て!」と電話があり、現場に行くと写真のような様子。移転して四十一年以上経つので、あちこちが老朽化しても仕方ないですが、水道管の漏水は場所を特定するのが大変で、「こりや困ったなー」と思いながら元栓を閉めて境内を探すと、幸いなことに倉庫横の水道蛇口が少し開いていただけでした。でも誰が開けたのかは未だ不明です。

お盆飾りについて

左の写真は昨年の三木町の堀さん宅のお仏壇です。高松周辺はお墓に飾る灯籠以外特別なお盆飾りをしませんが、ご参考まで。ナスの牛、キュウリの馬などは一般的にも知られています。こちらではゴザを敷き夏野菜や晒水、洗米もお供えされています。



「随想随筆」①

今月は毎月寄稿している『花園』の他に、1000字の読み切り一本と宗教新聞の連載コラム四本分のべ切があり、こちらの原稿を書いている時間がありませんでしたので、失礼ながら掲載前のコラム原稿を先にこちらに掲載したいと思います。

私は昭和三十九年、東京オリンピックの年にお寺の長男として生まれました。当時の自坊は空襲により伽藍を焼失したままだった為、幼少期の生活は一般家庭と全く変わりませんでした。否、裕福だった母方の祖父母には随分可愛がって貰ったので、普通以上に甘やかされたかも知れませんが。

父は跡継ぎの将来を案じたので、縁あって小学校卒業と同時に飛騨の古刹の小僧となりました。これが私の僧侶としてのスタートです。それまでの生活とは打って変わって、夏は四時、冬でも五時から読経です。その後、朝食を挟んで寺の内外を掃除しないと学校には行けません。その為、紅葉の時期には毎日遅刻気味でしたが、地域の人たちも禅寺の小僧をよく理解してくれていたもので、先生も大目に見てくれていたように思います。また小僧には日曜は勿論、夏休みも冬休みもありません。学校がない日は一日中作務です。クラブ活動に参加出来るのは平日の放課後と土曜日の午後だけ。それも夏は六時、冬は五時の昏鐘が鳴り終わ

るまでに帰らなければなりません。時々、昏鐘の当番を巡って三つ年上の兄弟子と喧嘩しましたが、それだけ当時は自由な時間が貴重でした。

中学時代だけでしたが、この小僧生活は私の人生に大きな影響を与えました。お経や作法を覚えたことは勿論ですが、良くも悪くも要領が良くなりました。仕事を命じられた時、グズグズしていると遊ぶ時間が無くなるので、なるべくスムーズに終わるよう工夫するようになったからです。またいくら早く終わっても、後でやり直しを命じられては元も子もありません。その為、物事の要点を把握する力を養った気がします。

そうした集団生活の処世術を身につけ

ることが出来たのも、今思えば周囲の大人が粘り強く見守ってくれたからでしょう。小僧といえども仕事の上では一人前に扱われます。だから失敗すれば回りには迷惑を掛けます。でも失敗しても怒られはしますが、「もうやるな」とは言われませんでした。出来るようになるまで何度も繰り返しながら、自分の責任を果たすことを教え込まれた気がします。

四回のうち二回まではこれまでの自分を振り返り、残り二回でこれからの寺院や仏教について思う所を書きました。折角なので来月以降も掲載したいと思います。